



## 来たる創造社会で必要なのは、自律分散型の実践共同体 これからのコミュニティデザインの形とは

●テーマ:ウェルビーイング視点のコミュニティデザイン

●ゲスト講師:酒井博基(株式会社ディーランド代表取締役)

### デザインを機能させ、ウェルビーイングな社会を創る

「デザインプロデューサー」という肩書きのもと、美術大学で教員や創業支援プログラムの責任者を務めたり、地域活性化のプロジェクトでつくった共創施設のセンター長に就任したりと、さまざまな活動を行っています。いろいろやっていますが、一番の関心ごとはデザインです。

僕は、デザインとは“よくすること”だと捉えています。では“よくすること”の“よい”とは为什么呢？

社会の価値観の変化によって“よい”とされるものも変化するため、時代の気分を敏感にキャッチすることが重要です。いまの時代の気分に合った“良い”とはなにか？を考えるうえで手がかりになると語ったのは「ウェルビーイング」でした。

ウェルビーイング(Well-being)は、well(よい)とbeing(状態)からなる言葉です。デザインはどこまでいっても目的にはなり得なくて、あくまでも手段。じゃあデザインの目的ってなんなのだろうと考えたときに、ウェルビーイングという概念を据えるとわかりやすくなるなと考えました。

ウェルビーイングについてもっと知りたくなり、ウェブメディア『ウェルビーイン

グ100 by オレンジページ』で“ウェルビーイング勉強家”としてインタビューなどの活動を始めたのです。それを3年以上続けてきたいま、ウェルビーイングとデザインの関係が理解できてきたように思います。それは「デザインを機能させるために、ウェルビーイング視点による、あらゆる分野の駆動目的(意味)のリデザインが必要なのでは？」ということ。これこそが、デザインという手段が持つミッションなのかなと考えるようになりました。

「ウェルビーイング視点による、駆動目的のリデザイン」は、まちづくりや商業施設、教育など、あらゆる分野に対して有効だと考えました。関わっているさまざまなプロジェクトを整理してみると、共通する大目的として「デザインを機能させ、ウェルビーイングな社会を創る」があり、それぞれの駆動目的のリデザインが、具体的なプロジェクトデザインに落とし込まれていることがわかりました。

## コミュニティデザインは、 変化の時代の不安を解消するヒントになる

今日の本題である「ウェルビーイング視点のコミュニティデザイン」を考えるためには、まず生きづらさの正体を探ることが必要です。平均寿命が延び“人生100年時代”といわれる昨今。何歳まで生きたいかを聞いたとあるアンケート調査では、「80歳まで」以下で回答した人が59.1%を占め、「100歳以上まで生きたい」と回答した人は17.6%にとどまりました。長く生きることは人類共通の目標のようにされてきましたが、実際には誰もが長生きすることを求めているわけではないのです。

また、さまざまなものが5000万ユーザーを獲得し、生活インフラになるまでに要した時間についてみると、飛行機:68年、自動車:62年、電話:50年です。これが近年の技術やツールになると、インターネットは7年、YouTubeは4年、『Pokémon GO』にいたっては19日と、どんどん短期化しています。

この2点から、僕らが抱えている漠然とした不安の正体は「長期化している人生×短期化しているライフスタイル」だと考えています。飲食店でいうと、「客単価減×回転率減」くらいつらい組み合わせ。だって、人生は延びていくのに、ライフスタイルはどんどん移り変わっていくんです。自分が高齢になったとき、みんなはどのようなコミュニケーションをしているんだろう、自分はどんなコミュニティに属しているのだろうと考えても、想像がつかないですね。それが、我々の不安や生きづらさの一因になっているのではないのでしょうか。

一方で地域に目を向けてみると、人口減少や、最近では“消滅可能性都市”という危機もあって、ますます不安は募ります。そんな変化の時代に、不安を解消するためのヒントになるのがコミュニティデザインなのかなと思います。

すべての課題をデザインで解決することは難しいけれど、変えられることもある。それは、私たちの価値観のものさしです。そのためにできるのは、ウェルビーイング

視点で駆動目的をリデザインし、豊かさのパラダイムシフトを促すこと。これまでの豊かさは大きく積み上げる“一極集中型”でしたが、これからの変化の時代では、小さく小分けにする“分散型”になる。収入源を複数持てる副業が注目されているように、AがだめならB、BがだめならCと、複数の選択肢を持つことで不安をやわらげることができるようになります。

豊かさのパラダイムシフトを促す手段として、自律分散型社会やシェアリングエコノミー、コミュニティデザインが考えられます。なかでもシェアリングエコノミーは有効です。シェアリングエコノミーとは、個人が持っている、スキルのような形のないものも含む“遊休資産”の貸し出しを仲介するサービスのことです。たとえば、空き家を活用したい自治体と活動場所がほしい社会人サークルをマッチングさせたり、語学が堪能な学生と外国語の論文を読みたい研究者をつないだりといったものが挙げられます。

これらのサービスが5000万ユーザーを超える生活インフラになるくらい成長するには、信頼社会の基盤構築につながるコミュニティデザインが重要です。自分の大切なものであればあるほど、信頼できる人とシェアしたいですね。コミュニティデザインによって人との信頼関係が深くなっていけば、こういうサービスがもっと加速的に広がっていくのじゃないかというのが僕の仮説です。

そのためには辿るべき道すじがあって、まず信頼社会の基盤構築となるようなコミュニティデザインがあり、それによって信頼関係ができると、互助の関係を促進するようなシェアリングエコノミーが広がる。さらに、ヒエラルキーのない自律分散型の社会が実現する。そして、持続可能なウェルビーイング社会という大目的に辿り着けるのじゃないかと思います。

## 社会の変化に伴って、人々の共通目的も変化する

ここからがいよいよ本題です。「ウェルビーイング視点のコミュニティデザインとは？」について探っていきましょう。

人類が誕生して以来、社会はSociety1.0＝狩猟社会に始まり、農耕社会、工業社会、そして情報社会と変化してきました。その変化に伴って、コミュニティの共通目的のあり方も変わってきました。

そして来たるSociety5.0は、「創造社会」になるといわれています。デジタル革新と多様な人々の創造・想像力を掛け合わせることで、社会の課題を解決し、価値を創造する社会。これまでは技術を原動力とした革新が社会の発展を担ってきましたが、これからは人間がいかに生きがいや幸せを感じられる社会を築くかに主眼が置かれるようになります。

創造社会においてのコミュニティは、ウェルビーイング社会を実現させるための大



目的と駆動目的が共有されている、自律分散型の実践共同体になると考えています。“駆動目的となる問い”に対して自律性を持って働きかける多様な“個”が集まり、つくられたコミュニティに期待するのは、「このコミュニティは私になにかを与えてくれるはず」ではなく、「このコミュニティにいることによって、なにかが生み出されいくはず」ということです。みんなが駆動してくためのエネルギーとなる、良質な“問い”がある。それこそが、魅力的な自律分散型のコミュニティの条件です。

“問い”を共有しながら成長していく実践共同体を形成していくことが、僕にとってのコミュニティデザインです。したがってこれからのコミュニティデザインとは、ウェルビーイング視点による駆動目的(意味)をリデザインし、生きづらさを解消する実践共同体を形成することだと考えています。

## 小商いを通じてネイバーフッドエコノミーを実現する商業施設

「コミュニティデザインの実践」として、これまでに関わってきたコミュニティデザインにまつわるプロジェクトを紹介します。

まずは、2012年に地域コミュニティを活用して中央線沿線のリブランディングを行った「中央線高架下開発プロジェクト」。僕はコミュニティをデザインするうえでかならず“駆動目的となる問い”を立てます。このプロジェクトにおいては、プロジェクトの一環として制作したエリアマガジン『ののわ』に書かれている、「東京の真ん中から新たなライフスタイルを創出するには？」がそれにあたります。

「東京の地図を立体にしたときの重心は、実は国分寺市なんです。だから、“東京の真ん中”と、このエリアを位置付けている。上り電車に乗ればいつでも都心のライフスタイルに触れることができ、下りの電車に乗れば緑に触れることができるという新しいライフスタイルをどう創出し発信していこうかというのが、このプロジェクトが駆動するうえでの“意味のリデザイン”です。『ののわ』は、その価値観を大事にしながらつくっていきました」

『ののわ』だけでなく、東小金井駅の高架下スペースを活用した地域共創型商業施設「コミュニティステーション東小金井」にも、設計やリーシング、活用方法など、ハードとソフトの両面から携わりました。

コンセプトは「東京だけど温かい 小商いを通じたご近所づきあい ネイバーフッドエコノミーの実践」。現在の経済活動の仕組みは、消費者がお金を払って物を買うという“消費経済”ですが、「長期化する人生、短期化するライフスタイル」が進むなかで将来を考えると、ずっとお金だけに頼るのは不安だったりします。それに、サービスを提供する側もけっこうしんどいんですよね。ライフスタイルが短期化しているので、どんどんビジネスを変化させ続けなければいけない。それらの不安を和らげる次の経済の形ってなんなのだろうと考えると、「小商い」がひとつの可能性を持つ

と考えました。

小商いは、近隣の互助関係が生み出します。それはお金だけに頼らず、自分ができることを差し出すことで互いに助け合う関係。ただし、すべてを小商でまかなうということではなく、あくまでも消費経済にプラスするという考え方です。

コミュニティステーション東小金井の開発で、このネイバーフッドエコノミーを促進させるための“複業的小商い”を推進していきました。これは、個人が本業と近いジャンルの小商いや、本業とは切り離れた趣味的な小商いをいくつか営むというものです。

さらに、複業的小商の報酬は必ずしも金銭だけではないこともポイントです。たとえばスキルセットや人的ネットワーク、自己理解、ポジティブな感情など。それらのさまざまな報酬を好きなようにブレンドしていけるような複業のスタイルを提案しました。

たくさんの人が複業的小商いをすることは、地域社会への参画や商業サービスの代替、セーフティネットの構築などにつながり、地域にもメリットがあります。地域との関わりや人と人とのコミュニケーション、自己成長が生まれる場所。民間企業が運営する、かぎりなくパブリックに近い性質を持った場所だからこそできることを、「小商い」をテーマに取り組みました。

## 地域と都市でウェルビーイングな ライフスタイルを補完し合う交流拠点

「AJIRO MUSUBI」というプロジェクトについてご紹介します。これは、南熱海に位置する狩師町「網代」を舞台に、廃校になった小学校をコミュニティスペースや共創スペースとして生まれ変わらせるというもの。足代は海や山、温泉といった豊富な地域資源を持つ一方、急激な人口減少と高い高齢化率、若年層の流出、単身世帯の増加、空き家の増加、産業の偏りなど、たくさんの地域課題を持っています。

このプロジェクトの“駆動目的となる問い”は、「地域と都市を結び 心豊かな良い時間を生み出すには？」。そこから導き出されたプロジェクトコンセプトは、「弱さを起点とした都市と地域の互惠的关系のデザイン」です。

地域課題＝弱さをデザインすることに取り組んでみようかなと。この街の産業は観光業や漁業が中心だったのですが、いまはなかなかうまくいっていない状況がありました。人口は約1400名。そのほとんどが高齢者なので、都市の人の力を借りていけないかと思ったのです。観光じゃないやり方で、都市の人といい関係性を結ぶためにはどうすればいいか。そこで、“ウェルビーイングになるための訪問”を起点に、地域の交流体験が生まれていく仕組みを考えました。

たとえば、AJIRO MUSUBIに地域課題解決型のプログラムを仕込み、都市の人たちがスタディツアーという形で訪れる。その体験が、都市で抱えるストレスなど、自分

の弱さを補完してくれることにもなる「地域と都市を結び、心豊かな良い時間を生み出す」場所をめざしました。ほかにも学生デベロッパーズキャンプやビジネスデザインプログラム、企業向け研修合宿プログラムなど、都市と地域をつなぎ関係人口を創出するさまざまなプログラムを用意しています。

AJIRO MUSUBIの“駆動目的となる問い”は今後どんどん増やしていきたいと思っています。『住民や網代に関わる多様な人々とともに新たな事業を共創するには?』とか、『網代に住む人の日常生活も豊かになるような、新しい観光のカタチとは?』『地域の空き家を、新しい産業が生まれる拠点として再生するには?』など、その問いに対していろんなプロジェクトが生まれるようなイメージです。

1Fにあるカフェもおもしろくて、メニューにふうつのドリップコーヒーとセルフドリップコーヒーを用意しました。セルフのほうが100円安いこともあって、自分でコーヒーを淹れる人たちが出てくるはず。それで淹れるのがうまくなってきたら、勝手にコーヒーを売ってくれていいよっていう仕組みにしているんです。そのかわり豆はうちのカフェから仕入れてねという。そうして消費者から生産者になっていくという体験を生み出したいと考えています。

今後、ここがどうなっていくのかすごく楽しみです。きっと5年後、10年後に答え合わせをするのだらうなと思っています。